

町立虎杖小学校 地域とともに120年

11月12日に節目を祝う記念式典



1998(平成10)年に増改築された現在の校舎

虎杖小は明治35(1902)年、地域住民の熱望により敷生村字クッタリウス番外地に「敷生簡易教育所」が設置されたのが始まりです。以来、学校・保護者・地域が一体となった教育で総勢3,500

人余の子どもたちの成長の場となってきました。地域との結びつきが強いのが特色で、地域の特性や資源を生かし、漁協と連携した体験活動や伝統芸能継承などの教育実践が有名です。一時期は11学級の規模も少子化や人口減で減り、現在の児童数は35人。3・4年生、5・6年生は複式学級です。

大きな節目を迎えるに当たり、4月にはPTAを中心とした記念事業協賛会が立ち上がりました。記念式典・行事の企画、記念誌発行などで祝う準備を進めています。児童らも地域の方への手作り感謝状の制作や記念誌の担当箇所など出番もあります。6月12日には「最後まで全力でやりぬこう」を合言葉に120周年記念の運動会を催し、コロナ禍で制限されてきた伝統芸能「虎杖浜越後踊り」を徐々に子どもと家族の大きな輪で楽しみました。同校は2度目の赴任となった関東英政校長は「グラウンドに広がる踊りに地域のパワーを見た気がしました」と学校だより「海鳴り」で感想をもらっていました。校長は「この学校は地域の方とともに地域の素材の中で学ばせてもらっています。コロナ禍の中ですが、開校120年を地域の方に祝ってもらえるものに」と話しています。



開校120年を記念した運動会のPTA種目「虎杖浜越後踊り」。マスク越しの笑い声が聞こえてきそうです(6月12日)

ふるさとのまちと人 幅広く学ぶ「白老未来学」始動

構築委員会・ワーキンググループ立ち上げ／指導モデルの策定に向け協議・検討を開始



町教委は令和4年度、「白老未来学」の構築に着手しました。ふるさと教育の充実を狙い、これまでの「ふるさと学習指導モデル」の実践を発展させる内容です。

環境の変化や課題 平成26年度から始まった同指導モデルは、それまで各校の教育課程に位置付けていたアイヌ文化を学ぶふるさと学習を、身に付けさせたい能力や態度、教育活動での場面・内容・方法・関連を各学年段階や教科の視点から見直したものでした。しかし近年、学習指導要領の改訂や子どもたちを取り巻く環境の変化をはじめ、各校の体験学習の連続性や系統性の視点の不足、体験の目的化など課題も見えてきました。

継承と再構築で幅広い視点 これらを踏まえ、「同指導モデルを継承・再構築し、学校教育に求められているたくましく未来を生きる子どもたちの育成」(町教委)を目的とした「白老未来学」の構築に着手しました。同未来学は、本町の自然や産業、歴史・文化、アイヌ文化、コミュニケーション能力を高める外国語の学習と、これまでにない幅広い視点を具体的な学習に盛り込む方針です。

白老未来学指導モデル作成へ

7月1日に発足した構築委員会は、学識経験者(アイヌ文化関連)、教育関係者(校長会、教頭会)、元町地域おこし協力隊の計6人、ワーキンググループ(WG)は各校の小中学校教諭6人で構成。WGは基本構想の協議に参加し、白老未来学の計画や教育活動を具体化する「白老未来学指導モデル」の作成



を担います。委員会、WGは来年1月までの予定で未来学の策定に必要な事項を協議・検討します。担当する小原健学校教育課指導主幹は「ふるさと白老への愛着を育むとともに、夢に向かって子どもたちが主体的に判断し行動しようとする態度を育てるものを目指したい」と話していました。